

福井・鹿兒島 中学生 教師の指導苦に自殺

息子の死 忘れないで



5

福井県池田町の町立中で2017年3月14日、教師から繰り返し厳しい叱責を受けていた2年の男子生徒(当時14歳)が、校舎から飛び降りて命を絶った。しかし、今年2月に町が再発防止を目指して改定したはずの教育大綱には、遺族にとって具体策と思えるものがなく、目を通した母は息子の姿が見えない」と感じた。

再発防止 願う被害家族



鹿兒島県奄美市で中学1年だった息子を自殺で亡くした父(奥)の話聞く佐賀大の学生たち＝佐賀市で8日、樋口岳大撮影

に至った」と結論付けた。報告書によると、担任が別の生徒は「身震いするくらい、すごい怒鳴っていた」と証言。副担任の指導では過呼吸を訴え、土下座をしようとしたこともあったが、担任はそれを知りな

取り進むよう切望した。だが、町の教育方針を示す新たな大綱には「育つ力を育てる」などの言葉が並ぶ。遺族の目には一般論にしか見えぬ、生徒の苦しみにも真剣に向き合っているとは思えなかった。生徒は畑仕事をする祖母のために椅子を手作りするなど優しかった。息子の死から2年半。母は「再発防止のために何をやっているのか、まったく見えない」と訴える。

学校生活が関係する自殺や事故の遺族らを対象にした毎日新聞などのアンケートでは、回答した62人のうち25人が「学校や教委の再発防止策の履行は不十分」と答え、「十分履行」(5人)、「ある程度履行」(8人)を大幅に上回った。15年11月4日、鹿兒島県奄美市で市立中1年の男子生徒(当時13歳)が、担任から指導と家庭訪問を受けた直後に自殺した。サッカー部でゴールキーパーを務め、前日も試合に出ていた。市の第三者委員は18年12月の報告書で「同級生に嫌がらせた」と思い込んだ担任の不適切な指導が「生徒を追い詰めた」と認定。学校と市教委に再発防止の第一歩として「どの時点で何をすればよかったのかを当事者の立場で主体的に検証すべきだ」と提言した。市教委は今年5月、再発防止策を検討する大学教授や学校関係者らによる委員会を設置し、9月には生徒の父が自ら希望して委員に加わった。父は「自分のできることは何でもしたい」と語る。

今月8日、佐賀大教育学部(佐賀市)の授業に生徒の父の姿があった。人前で語るのは苦しい。それでも講師を引き受けたのは、教師を目指す学生たちに知ってもらおうと、子供を守り、教育現場の助けにもなると考えたからだ。父親はこう呼びかけた。「こんなことはもう二度とあってはならない。そのために息子の死を、どうか忘れないでほしい」

＝おわり

(この連載は樋口岳大、吉川雄策が担当しました)